

味を再考させる好著であるといえよう。

(岩波書店 一八〇〇円十税)

小熊英二著

## 『民主』と『愛国』——戦後日本の ナショナリズムと公共性——

松浦 勉

一九九〇年代中葉以降ネオ・ナショナリズムと日本版ポスト・モダンが、「戦後民主主義」思想を挾撃している思想状況に抗して、政治思想史家丸山真男に代表される戦後民主主義をうみだした、敗戦後から一九七〇年代初頭までの多様な「戦後思想」の展開とその「全体像」を検証・俯瞰することで、その「最良の部分」を救い出し、再生させようというのが著者の問題意識である。

課題と方法にもとづく斬新な結論はこうなる。一九五五年以前の「第一の戦後」には、「真の愛国者」として総力戦の「合理的遂行」の必要を提言し

た丸山真男らが、かれらの戦争体験が形成した「国民的共同体意識」を土台として、「近代」「市民」「民族」などの諸概念を読みかえ、「ナショナリズムとデモクラシーの総合」として社会変革へわれわれ日本人の「主体性」の確立のための「戦後民主主義」思想を構築するが、「第二の戦後」になると、戦後民主主義のなかで「戦争責任」の追及と不可分とされていた「戦死者の記憶」が江藤淳などの「保守ナショナリズム」のシンボルとして「回収」され、戦後民主主義が体現した「民主」と「愛国」の共存状態は崩壊した。

本書は、戦後思想にかかわる多くの事実と主張を説明・紹介しており、有益であるが「学術書」としては大きな難点がある。

本質的な問題として、著者がその「戦後思想」の定式化の素材となる「代表的人物」として特立している丸山真男の思想については、「戦中戦後を貫

く思想的事実として：丸山の近代性の思想と啓蒙の立場そのものが：戦時総動員の思想として形成」されたとする中野敏男『大塚久雄と丸山真男』（青土社、二〇〇一年）の有力な把握と評価に対する反証が提出されていない。

つまり著者が「共存常態」にあつたと把握する「民主」と「愛国」のそれぞれの内実と両者の思想的連関それ自体が問われているのである。

本書の分析内容とのかかわりでいえば、著者が「デモクラシーとナショナリズムの総合」がその特質だとする丸山真男の戦後思想が、「第二の戦後」の著者鶴見俊輔や小田実の戦争責任論のような、へわれわれ日本人の自民族中心主義的、侮蔑的なアジア認識を克服する営為につながる論理と主張を決定的に欠落していた事実とその思想的根柢が究明されなければならないであろう。（新曜社、六三〇〇円十税）